東方永刻記　～Iku’s Diary～

ヒロユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方永刻記　～Ｉｋｕ，ｓ　Ｄｉａｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ６３９９Ｓ

【作者名】
ヒロユキ

【あらすじ】
お転婆な総領娘、比那名居天子の世話にいつも手を焼いている永江衣玖。そんな彼女が時折、心に思うことを徒然に書き記した永刻記と呼ばれる書物がある。※こちらの作品は「東方ｐｒｏｊｅｃｔ」を元にした二次創作作品です。作者の勝手な作品解釈やキャラクター崩壊などが多分に含まれます。以上の点を了承された方のみ、お読みください。

Day1　すごろくのこと（前書き）

どうも、ヒロユキです。
今回は急な思いつきで、二次創作作品というものを書いてみようと思い立ちました。今まではオリジナルの作品のみを投稿してきましたので、このような作品を投稿することにおいて、至らないこと多々あると思いますが、読者の方々にはどうかご容赦願いたいと思います。

Day1　すごろくのこと

――すごろくのこと――

永江衣玖が記す。

総領娘様のお話をしましょう。

ええ、皆様御存知の比那名居天子様のお話です。

いつでも暇を持て余し、少々がさつでお転婆で、何かと破天荒で、トラブルメイカーで、イタズラ好きで、わがままなお嬢様のお話です。

おっと、私がこんな乱暴な紹介の仕方をしているとバレてしまえば、また総領娘様がお怒りになってしまうので、さらにこう付け加えておきます。

総領娘様、比那名居天子様。

いつも可憐でお淑やかで、聡明で、瞳の色は明るく澄み渡り、美しく、野辺に咲くひまわりのような可愛らしい、あのお嬢様であります。

これくらいでいいしょうか。

それでは、そろそろ、あのお方のお話を少々披露することにしましょう。

あれは、いつのことでしたでしょうか。

月日はいつでもとどまることを知らない川の流れの如く過ぎ去ってしまうので、私の記憶にも定かではありませんが、総領娘様はあ

の日も相変わらず、暇を持て余していらっしゃったようでした。
ご自慢の青く輝く美しい髪をなびかせて、ノックもせずに私の部屋に颯爽と飛び込んでいらしたのを覚えています。
そして、突然のことに驚いて呆気に取られている私を尻目に、総領娘様は開口一番に、

「衣玖、今日は私と遊ぶのよ！」

そうおっしゃいました。

「如何なされましたか、総領娘様」

私はその時、椅子に座って読書の最中でありましたが、すぐさまその本を机の上に伏せ、そう聞きました。
すると、総領娘様は私の言葉を聞き、「あっ」と小さく驚いたかと思うと、不機嫌そうにぷりぷりと頬を膨らませます。

「もう、衣玖！」

とご立腹の様子です。

「前からその呼び方は止めてって言っているでしょう」
「その呼び方、と申されますと？」
「総領娘よ、総領娘！　私、その呼ばれ方、あまり好きじゃないの」

そうして、ぷい、とそっぽを向いてしまいます。
それは、最近、総領娘様が妙にこだわっていることでした。困ったことに、総領娘様は、毎回、「総領娘」と呼ばれることがお気に召さないご様子なのです。

「あら、ではどのようにお呼びするのがよろしいので？」
「だから、最近はいつも言ってるじゃない。天子よ、天子」

総領娘様は口を尖らせます。

「天子様、ですか？　しかし、私としては、総領娘様の方が、幼い頃から呼び慣れているので、いささか楽でいいのですが」
「あなたの都合なんて知らないわ、衣玖。わ、た、し、が、その呼び方にはうんざりなの」

しかし、私はそれを聞いて、つい微笑んでしまいます。

「あら、でもその割に……」
「何？」
「他のお方がそう呼ばれた時には進んで返事をなさるではありませんか」
「へ？」

すると、総領娘様の大きな瞳が意外そうにぱちぱちと開閉しました。私は、言葉を続けます。

「なのになぜ、私にだけ、そう仰られるので？」
「そ、それは……」

返答に困ったのか、何やらもごもごを口の中で言葉を飲み込んだ後で、総領娘様の可愛らしい頬が赤く色づきました。

「あ、あ、あなたは私の下僕だからよ」
「下僕、でございますか？」
「そうよ。だ、だから、特別にそう呼ばせるのよ」

なるほど。
しかし、それでは先ほど言っていた「呼び名にうんざりしている」という理由はどこに行ってしまったのでしょう。
私はそのことに少々矛盾を感じましたが、もちろん、それに反論しようとは思いませんでした。
その代わり……。

「あら、それはそれは恐ろしいことを仰るのですね。下僕ということは、私はこれからずっとあなたの命令に常に従わなくてはならないのでしょうか？」

と、できるだけ切なげな声を出し、瞳をうるませて、総領娘様を見上げます。
すると、突然のことに驚いた総領娘様は、案の定、慌てて首を振りました。

「え、そ、そんなことまでは言ってないわよ、衣玖」
「そうですか、それはありがたいことです」
「とにかく、総領娘っていうのはやめて。いい？　これ以上口答えしちゃダメよ」
「ふふふ、分かりましたよ。天子様」

私がそうお呼びすると、総領娘様は満足したように大きく頷きました。
どうやら、それでよろしいようです。
そして、不意に私は、総領娘様がお手に持っている物が気になりました。
なにやら、長方形の板状のものですが、

「あのう、天子様。それは一体？」
「ああ、これね！」
私が指差すと、よくぞ気づいたと言わんばかりに、総領娘様は明るい声を出します。
「衣玖、私は今日これのためにここにやってきたのよ」
「はあ、それでは、それを使って、ここで何かをするわけですね？」
「そうよ。実はこれ、昨日、地上に降りて、怪しげな『こーりんどー』とかいう店で買ってきたものなの。とても珍しいものだから、折角だし、衣玖と一緒にやろうと思って」
「はあ……」
そう自信有りげに、胸を張って話す総領娘様に私はため息を漏らしました。
どうやら、この様子では、また無許可で地上に降りてしまったようです。本当はいけないことなのですが、それはまたの機会にきちんと言い聞かせておきましょう。
全く、総領娘様のお転婆っぷりは筋金入りのようです。
一方で、そんな私の気持ちなど露知らず、総領娘様は自慢気に脇に抱えていたそれを机の上に置きます。
「じゃじゃーん。衣玖、これを見なさい！」
「これは、なんでしょうか？」
一見した様子では、それは平べったい長方形型の板状の物です。よく見れば、表面には、たくさんの色とりどりのマス目が描かれており、その中には何やら文字で細かい指示が書かれていました。
さらに、この「何か」には、付属品らしき小さな箱があり、その中には数が書かれたサイコロやら、外の世界の紙幣らしき物やら、

その他にも何に使うのかよく分からないカード、小物がぎっしりと入っていました。
私はそれらをしばらく無言で見つめていましたが、それらは、皆どれもカラフルなもので、見ているだけで、心がワクワクするものばかりです。
しかし、やはりどれを見ても、いまいち私にはそれが何をする物なのか、判別することが出来ません。知識にはそれなりに自信のある私でしたが、これにはお手上げでした。
すると、私の驚いた様子を見て、総領娘様は得意になったのでしょうか、

「ふふん、これはいくら衣玖と言えども、さすがに知らないでしょう」

と胸を張り、鼻高々な様子で仰います。

「ええ、知りません。これは何なのです？」
「仕方ないわね。ここは物知りな私が、親切にも、あなたに教えてあげるわ」
「お願いします」
「いい？　衣玖、これは『人生ゲーム』と言うものよ」
「人生げーむ、ですか……」

やはり、聞いたことはありません。

「それで、これはどうやって遊ぶのですか？」
「簡単よ。まず最初に、お互い同じ金額の擬似紙幣を持って、スタートと書かれている場所に自分の駒を置く。そして、順番にサイコロを転がしていくの。サイコロの出た目に応じてマスを進んでいって、最終的にゴールまで辿りつければいいの」

総領娘様は嬉々としてマス目と道具を指さしながら説明します。
「でも、ただゴールするだけではダメ。ゴールするまでの道のりであるマス目に書かれたイベントに遭遇したり、買い物をすることによって、所持金を増やし、最終的にどれだけ多くのお金を手に入れられるかが勝負になるわ」
「なるほど、それだけを聞くと、あまり複雑なルールではありませんね」
「そうでしょ。だから初心者でも大丈夫。詳しいマス目ややり方の説明については、実際にしながら説明するわ。だから早速勝負開始よ」

と。
そんなこんなで、すぐさま、その人生ゲームとやらが、私の部屋で開始されたわけなのですが――。
意外なことに、初心者である私の方が、どんどんお金を手に入れていき、ゲームの中盤ではすでに、総領娘様との差が三倍以上となってしまいました。
これでは勝負にならないのでは、と心配した私でしたが、
「衣玖、これで勝ったと思わない方がいいわよ」

ふいに、サイコロを転がしながら、総領娘様がそう話しかけてきました。私は、持っている所持金の計算をしながら、聞きます。
「それは、どういうことでございましょう？」
「ふふん、このゲームはね、衣玖。後半からのマス目によっては、いきなり大金を手に入れるチャンスが巡ってくることが多くあるの。それは一つの賭けにもなっていてリスクも高いけれど、同時に、逆

転の目を引くことも可能よ。だから、今勝っているからといっていい気になるのはよくないわ」
「なるほど、これはなかなか奥の深いゲームなのですね」
「そうよ、これからが本当の勝負なんだから！」

しかし、その総領娘様の言葉はあっという間に水泡に帰してしまうことになります。
と、言いますのも、その後の勝負の展開も、特に総領娘様の華麗な逆転があるわけでもなく、私が無一文になるという思わぬ悲劇が巡ってくることもなく、そのまま、私の圧勝で幕を閉じたのです。
それは、なんともあっけないものでした。
すると、案の定、自分の思い通りの結果にならなかったことが腹立たしいのか、総領娘様はその可愛らしいほっぺをまたしてもぷりぷりと膨らませました。

「もう、これはどういうことよ！」

とバンバンとボードを叩きます。

「どういうことも何も、ゲームですから」
「む、むう。私より初心者の衣玖が勝つなんてつまんなーい」
「そう言われましても、これは運の良し悪しも関係してくるのでしょう？　単純に経験の差だけで、天子様が勝つというものでもありませんよ」
「ということは、衣玖。今のは私に運がなかったってこと？」
「そ、そういう考え方も、できるでしょうね」
「なら、もう一度やれば、今度は運が向いてくるかもしれないわね。衣玖、じゃあ早速もう一回戦やるわよ」

私の言葉で、総領娘様は再びやる気を取り戻したようでした。重

なっていた擬似紙幣をまた配り始めます。
私はその間を利用して、温かい紅茶を二人分用意すると、まもなく、新たな決戦の火蓋が切られました。

そして――。
ずいぶん時間が経ち、
何度目の勝負だったでしょうか。

「もう、何でよお！」

相変わらず私に負け続ける総領娘様は、ゲームの途中で紙の紙幣を宙に放り出し、そのまま仰向けにひっくり返りました。

「何で勝てないのお？」

と、床の上で、じたばたと両手を振り回します。

「天子様、そんなことをしてはいけません。はしたないですよ。それに、服も汚れてしまいます」
「いいのよお。私は天子なんだから」

何の理由にもなっていないことを、総領娘様は暴れながらおっしゃいます。
その度に、床に落ちていた紙が宙を舞い踊りました。
きらきら光る青い髪も総領娘様が頭を揺する度に床をさらさらと流れます。
総領娘様は、しばらくそうして、うめいたり、動いたりの動作を繰り返しておいででしたが、急にその動きを止め、じっと天井を見つめました。

「でも、人生って、こんな風に急にお金持ちになったりなんてことは、そうそう起こらないわよね」

ぽつり、とそう言います。

「どうされました？」

「ううん、なんだかちょっと思ったのよ、衣玖。人生って本当はもっと退屈で、単調で、凹凸のないまっ平らな、面白くないことばっかりなのよ」

「はあ……」

「このゲームみたいに一つのマスを進んだら子どもが出来たり、家が立ったり、急に有名人になったりしないのよ。ただ、こうして、退屈なことが続いていくの。こう、どんぶらこ、どんぶらこって感じでね」

「ふふ、どんぶらこどんぶらこ、ですか？」

それはそれで愉快な人生な気もしますが。

しかし、総領娘様はつまらなそうに、

「そうよ、どんぶらこよ。どんぶらぶらぶらどんぶらこよ」

と繰り返します。

どんぶらぶらぶらどんぶらこよ――。

私の中で、その言葉がゆらゆらと海の中を漂うように、右に左に流れていきました。波に転がされて、ひっくり返って、それでも、何もなくて、また揺られて……。

退屈で、退屈で、暇で、暇で、

面白くない、毎日。

「衣玖……」
「はい？」
「退屈なの」
「はい」
「退屈よ」
「はい」
「面白くないの」
「はい」
「衣玖、つまんない」
「そんなに……」
「……」
「そんなに、私といるのがお嫌ですか？」

急な思いつきで、そう言った途端でした。
びたん、とものすごい勢いで、総領娘様が体を起こしました。その一言が思いもよらぬことだったのか、私の方を見て、血相を変え、ぶるぶると頭を振ります。

「な、何を言ってるのよ、衣玖！」
「はい？」
「私は、私は衣玖といるのは楽しいわ。勘違いしないで、私はこのゲームのことを言っていたの」
「そうですか」
「ほんとよ、ほんと。嘘じゃないわ。私、衣玖といるのが楽しいの。だから、毎日衣玖のところに来てるでしょ。他のところが、みんな退屈だからよ」

それを聞いて、私は、なんだかおかしくなると同時に、胸の内に温かな風が舞い込んできた気持ちになりました。

「そうですか。すいません」

と頭を下げます。

「な、何を謝ってるの？」

「いえ、天子様があまりにも嬉しいことをおっしゃってくださいましたので、意地悪なことを言って、困らせてしまったのは申し訳なかったな、と」

その瞬間の、総領娘様のお顔と言ったら……。

ああ、こんなことを書いてしまうと怒られますでしょうか。

総領娘様は、何とも恥ずかしげに頬を染められ、声にならない言葉を何か口走った後で、私の胸に駆け寄り、顔をずむっと、うずめてしまったのです。ふふ、今思い出しても、思わず微笑んでしまいます。

あの、総領娘様の愛らしいことと言ったら！

「ば、馬鹿衣玖！」

総領娘様は、そう言って、乱暴な力で私の服を掴みました。

「はいはい。馬鹿衣玖で結構でございます」

「あ、あなたは、何様のつもりよ！」

「申し訳ありません」

「もう！　わ、私をからかった罰よ。もう一回勝負しなさい」

「人生ゲームをですか？　退屈とおっしゃったこのゲームを？」

私がそう訊ねると、総領娘様は力いっぱい頷かれました。

「ええ、今度は勝つまでやめないんだからね」

「勝つまで、でございますか？」
「そうよ。勝つまで！」
「ふふ、分かりましたよ。私も、最後までお付き合いしますとも、『総領娘』様」
「ムキーッ、だから、私は天子って呼びなさいって言ってるでしょ！」

そうして、私は総領娘様から、一通り、ぐちぐちと文句を言われた挙句、また人生ゲームをやる運びになったわけなのですが、そんなこんなで、気がつけば今日一日が終わってしまっていました。

何とも、長い一日だったような気がします。
しかし、そこで一つだけ、不思議なことがありました。結局、あの後、総領娘様は私に勝つことが出来たのかどうか、なぜか、私の記憶にはないのです。
私が勝ち続けて、終わったような気もしますし、最後の最後、総領娘様が大逆転で勝利なされた気もします。
なんとも、奇妙な話です。
しかし、とはいえ、そのことについて、繰り返し考えていると、もしかすると、どちらも勝っていないのではないかと思うこともあるのです。
おかしなことを言っていると思われるでしょう。
しかし、そう申しますのも――。
実は、総領娘様と私の人生ゲームは、今でも眼に見えない形で続いているのではないかと思うからなのです。
総領娘様はあれからというもの、その人生ゲームを部屋に持ってくることはありませんでしたが、今でも、私と総領娘様が部屋で何もせず、退屈にぼうっとしていると、どこか私の心の中で、交互にサイコロを転がし合っているのではないかという、不可思議な感覚がしてならないのです。

それは、きっと、とてもとても退屈なことなのでしょう。私は思います。
しかし同時に、
それはとても嬉しいことなのではないか、とも思います。
なぜなのか、そう感じるのです。

総領娘様とそうしていることを、
いつまでもゲームが続いていくことを、
私は今でも時々思い出しては、つい微笑んでしまうことがあります。

Day1　すごろくのこと（後書き）

のんびりとだらだらした退屈な毎日でも、大好きな人と暮らせるのなら、それはそれで、幸せなことかもしれませんね。ふと、そんなことを思った今日この頃でございます。

読者の方々、いかがでしたでしょうか。少しでもこの作品をお読みになり、何かを感じてもらえたら、作者として非常に嬉しく思います。

尚、この作品は連載小説とされていますが、次回の更新につきましては全くの未定でございます。もし、このまま長期に渡り、作品を連載ができる状態にない、と作者が判断した場合、この作品を短編作品として投稿しなおすこともありますので、ご了承下さい。

Ｄａｙ２　いたずらのこと（前書き）

どうも、ヒロユキです。
意外にも早く二話を書き終えてしまったので、投稿します。少しでも楽しんでもらえたら、うれしいです。

Ｄａｙ２　いたずらのこと

――いたずらのこと――

永江衣玖が記す。

総領娘様のお話をしましょう。

ええ、皆様御存知の比那名居天子様のお話です。

いつでも暇を持て余し、少々がさつでお転婆で、何かと破天荒で、トラブルメイカーで、イタズラ好きで、わがままなお嬢様のお話です。

おっと、私がこんな乱暴な紹介の仕方をしているとバレてしまえば、また総領娘様がお怒りになってしまうので、さらにこう付け加えておきます。

総領娘様、比那名居天子様。

いつも可憐でお淑やかで、聡明で、瞳の色は明るく澄み渡り、美しく、野辺に咲くひまわりのような可愛らしい、あのお嬢様であります。

これくらいでよろしいしょうか。

それでは、あのお方のお話を少々披露することにしましょう。

あれは、私が自室で静かに読書をしている時のことでした。

その日は、朝の内に所用を済ましてしまっていたので、午後からの時間にかなり余裕があったのを覚えています。

そのため、昼の食事を終えた私は、穏やかな風が吹きこんでくる

西側の窓を開け、紅茶の香しい匂いを楽しみながら、椅子に腰掛け、本のページを捲っていたのでした。
それは、私だけの、静かなくつろぎの時間です。
確か、その本に載っていたのは、とある冒険者のお話でした。

若きその冒険者は、世界を旅する途中で、ある町を訪れます。
その町では、ずいぶん前から山の洞窟に棲む魔物の影に怯えていました。その魔物は、毎月のように町に降りてきては、町人を襲って食べてしまうのです。
それを聞いた冒険者はいきり立ちます。
町の人々が危険だ、生きて帰れない、と引き止めるのも無視して、魔物が潜む山の洞窟に果敢にも向かうと言い出したのです。
以前からその洞窟に魔物を退治に向かい、帰ってきた者がいないことを知っていた町の人々は、彼が旅立ってしまった後、口々に彼のうわさ話をしました。
きっと彼はもう戻ってこないに違いない。もう魔物に食われてしまったのに違いない。これまで同じように殺されてしまった町の人々のように……。
無謀なことはするべきではないのだ。人々は声を揃えて、そう言いました。
しかし、勇敢な冒険者は八日目の晩、一匹の魔物の死体を引っ張って、町に戻ってきます。彼の体は傷だらけで、満身創痍の戦いを繰り広げたことが窺えましたが、その青く美しい瞳は凛々と輝き、決して途絶えることのない勇気の色に満ちていたということです。
ついに町に、平和が戻ってきたのです。
人々の顔は明るくなり、危機を救ってくれたその冒険者の勇気を称え、お祭りが始まりました。その祭りは三日三晩続き、町に残っている酒が空っぽになるほどの勢いだったと言います。
そして、その豪勢なお祭りは、その冒険者が居なくなってしまっ

た後も、伝統として、その町で続けられているということでした。
あの、冒険者の何物にも代えがたい真実の勇気を忘れないために――。

その物語を読み始めて、一体どれほどの時間が経ったのでしょうか。
ふと、西側の窓からの伸びた日差しが私の肩に当たっていたのに気づいた時、誰かが、
トントン――。
私の部屋の扉をノックしました。
私はすぐに立ち上がり、本にしおりを挟んで机に置くと、返事をします。

「はい、どちら様でしょう？」

もしかすると、総領娘様が遊びに来たのかもしれない。私は咄嗟に思いました。
何より、この部屋を一番訪れることが多いのは総領娘様でしたし、あのお方は朝から晩までいつでももれなく暇を持て余しておいでですので、暇つぶしに私に会いに来ることは、想像に難くありません。
しかし、そこで私はあることに思い当たります。よくよく思い出してみると、総領娘様は大抵、ドアをノックすることがないのです。大体、ノックもせずに部屋に飛び込んでくるか、したとしても、『衣玖ー、いるー？』と同時に私の名前を呼びますので、すぐにお嬢様だと分かるのです。
今回はその例ではないとすると……。
誰か別の用事を持ってきた人でしょうか。
一向に返事がないのを不審に思いながらも私は部屋のドアを開けました。

「はい、何か御用でしょうか？」

しかし、意外なことに……。

何と、ドアの目の前には、誰もいなかったのです。

私は非常に驚き、慌てて周囲の廊下を探しましたが、人影らしき者は見えません。人っ一人、見当たらないのです。

これは、どういうことなのでしょう。

もしかすると、ノックしたと思ったのは、何かの勘違いだったのかしら。私は考えました。

風の吹き具合いでドアが揺れ、誰かがノックしたように聞こえたのかもしれない。ありえない話ではありません。

しばらく私はその辺りを探していましたが、やはり、さっきの結論が正しかったのだろうと思い、部屋へと引き返しました。ドアを閉め、再び椅子に座ります。

そして、また本を読み始めたのですが、ものの五分も経たない内に、再び誰かがドアをノックします。

トントン、トントン――。

今度は、よく耳をすましてみます。すると、明らかに風の音とは違う気がしました。

やはり、誰かがドアを叩いているのです。

「はい」

私はもう一度本を閉じると、部屋のドアを開けます。

しかし、やはり部屋の前には誰もいません。一体全体これはどういうことなのでしょうか。私は今度は先程よりも入念に周囲を調べます。廊下の曲がり角の影や置物の後ろ。もしかして、と思い、ドアの裏側も見ましたが、誰も見つかりません。いやはや、奇妙な話です。

もしかすると、私の耳は聞こえるはずのないノックの音を聞いているのでしょうか。
空耳という奴です。幻聴とも言いますね。ここまで来ると、そんな可能性も否めない状況になってきました。
ですが、それ以外の可能性にも私は当然、気がついていました。
それは、誰かのイタズラ、という可能性です。
私は、再び部屋に戻り、読書を再開してみました。すると、案の定、今度は二分も置かずにドアがノックされます。私は、やはり、という気持ちで立ち上がると、今度は先ほどよりも早くドアに駆け寄り、ぱっと勢いよく開けてみました。
すると、やはりドアの前には誰もいませんでしたが、仄かに、何者かの匂いが香りました。これは今飲んでいた紅茶の残り香ではありません。たった今、この場所に立っていたはずの人物の匂いです。
そして、私にはその匂いに覚えがありました。
間違いありません。あの『お方』です。
一体どういうつもりなのか、そう思いながら、もう一度だけ周囲を探して、三たび、部屋に戻りました。このままドアの前に立って様子を窺おうかと思いましたが、そこで、妙なことに気が付きます。
あら、部屋の窓はあんなに空いていたかしら。
窓の開き具合が、先ほどよりも、大きく開いている気がしました。
もしや……。
と思い、机に目を向けてみると、本の位置が微妙にずれています。私は本を手にとってみました。開くと、先ほど挟んだはずのしおりが見当たりません。
「あら？」
私は驚いて、しおりを探しましたが、それはすぐに見つかりました。
最初のページ、表紙の裏に挟んであったのです。もちろん、私が

挟んだはずがありませんから、他の誰かということになります。しかしこれでは、折角読んでいたのに、一体どこまで読み進めたのか、またいちいち確認しなければなりません。

「……」

私はため息を吐きました。

この様子では、また何か予測外のことが起こるやもしれません。そう思い、周囲を警戒しつつ、ゆっくりと腰を下ろしまず。

と、その途端、

ブーーーー。

椅子に置かれていたクッションが急に低い音を出しました。

「ひゃいっ！！」

私は不意を衝かれて飛び上がり、その次の瞬間、頭上から何かが降ってきたのに気が付きました。

ポフ、と頭に柔らかいものがぶつかり、その何かが白い粉を周囲にまき散らしたのです。視界が白い粉でまみれ、私は大きく咳き込みました。

折角の服も本も全て真っ白です。

「ケホッ、ケホッ……」

すると、

「あー、衣玖じゃない、どうしたのその格好。おっかしーんだ」

何やら陽気な声が聞こえたと思うと、総領娘様が窓の向こうに立っておいででした。笑いを堪えながら、こちらをこちらを指さして

見ています。

「なになに、どうしたの。何があったのよ衣玖。あなた、自分の姿を鏡で見てごらんなさいよ。まるで真っ白お化けよ」

その瞬間、私は全てを悟りました。

「なるほど、やはりこれは全て、天子様の仕業、というわけですか？」

すると、総領娘様は悪びれず胸を張ります。

「えっへん、そうよ。中々準備が大変だったんだから」

「は、はあ……」

「……」

なぜか、総領娘様が私の顔をじろじろと覗き込んできます。

「あ、あのう……」

どうしたのでしょう。私の真っ白な顔がそんなに気になるのでしょうか。

「衣玖、何か言うことはないの？」

「は、はい？」

「ほ、ほら、私にはイタズラのセンスがある、とか。わ、私は天才だし」

「センス、ですか？」

しかしながら、私にはよく分かりません。思い出してみても、他

人にこんなイタズラをしたことなど、私の人生には一度もありませんでしたし、誰かからされたということもありませんでした。
比較対象のない物事に勝手な判断で評価を下すのは、後々、危うい結果を導いていしまうかも知れません。

「ええと、よく分かりませんが……。しかし、これらの道具はどこで？」
「それは、地上で買ってきたのよ」

なぜか、つまらなさそうな表情で総領娘様はおっしゃいます。
どうやら、また、勝手に地上に行っていたご様子です。私が度々注意しているのにも関わらず悪びれすあっさり発言してしまう辺り、その行為に総領娘様は何の罪の意識を抱いていないようでした。
しかし、それを除外した上でも、先ほどから総領娘様の様子は妙です。
せっかくイタズラが成功したというのに、なんとも優れない表情で、ぼんやりと私を見つめています。

「もう……何もない、の？」
「はい？」
「私に言う事よ」
「ああ、はい。もちろんありますよ」

私は頷きました。
これでも総領娘様の付き人ですから。

「天子様、よろしいですか？　このようなことは、いくらお遊びでも他の方にこのようなイタズラをしてはいけませんよ。ただでさえ天子様は普段の素行に少々問題があると噂が広まっておりますから、これ以上評判が悪くなると将来素敵な殿方から見向きもされないと

いうことになりかねません。私はいいとしても……」
「もう！」
すると、急に総領娘様が言葉を遮りました。
「な、何ですか？」
「それじゃ、『いつもの衣玖』じゃない！」
いつもの衣玖じゃない。
私には、総領娘様のおっしゃった意味がよく分かりませんでした。一体、何をお怒りになっているのでしょう。
私がいつもの私であって何がいけないというのでしょう。むしろ、いつもの私ではないことの方が問題なのではないでしょうか。
何だか、先ほどから総領娘様のご様子は、妙なことばかりです。もしかすると、道端でおかしな物でも拾って食べたのかも知れません。
総領娘様の場合、ありえないとも言い切れないところが恐ろしいものです。
と、
「私ね、地上に降りた時に、ある場所に行ったの」
急に総領娘様が話し出したので、私は一瞬口を閉じました。
「……は、はい。如何なさいました？」
「数日前のことなの……知ってる？　最近、地上には新しい建物が建ったの。何でも命蓮寺、っていうお寺よ」
それなら、私も聞き及んだことがありました。何でも、元々は空

飛ぶ船だったとか……。それが急に地上に現れたものだから、またしても異変解決のために例の博麗の巫女たちが動いたという話でした。

結果的に、その船は、害のあるものではなく、とある人物の封印を解くことで異変は収まったというわけです。

「そうそう、知ってるのね。それでね、私はそのお寺に行ったわけよ」

「は、はあ」

「そこにはいろいろな妖怪や人間たちがいてね、聖白蓮って人がそのお寺を作ったって」

私は総領娘様のお話に静かに耳を傾けています。

「そこで、私はその聖白蓮って女の人に会ったわけだけれど……」

少し言葉を止め、総領娘様は私の顔を覗き込みます。

「ど、どうされました？」

「うーん、実はね、その人、衣玖にそっくりなの。ええと、姿形がって意味じゃないわ。何だかいつも冷静で、知的で、優しくて、こうふんわり包んでくれるような雰囲気がとてもよく似てたの。周りの人たちもその人をとても尊敬しているみたいで、みんな尊敬の眼差しで見ていたわ。私も、なんだかその気持ちが分かる気がした」

その方を思い出しながら話しているのか、総領娘様は遠くを見つめるように瞳を透き通らせました。

「でもね、あの人、衣玖よりもすごくパワーがあるっていうか、ね。胸の中に決して汚されない気品に満ちた高貴な魂を秘めているって

いうか、何だか、近くにいるだけで、圧倒されるっていうか……ああ、か、勘違いしないで、別に衣玖が弱々しいとか、そういうことを言うつもりはないの」
「ふふ。ええ、もちろん分かっていますよ。天子様」
私はその総領娘様の少し慌てた様子に目を細めながら答えます。
「とにかくね、私はその聖って人がとても完璧に見えた。いつでも静かな微笑みを絶やさないで、みんなをその綺麗な瞳で見守っているの。いつも清らかで決して……乱れない」
「……」
「それで、私はつい気になって聞いちゃったのよ。その聖って人に」
「何を、です？」
私は不思議に思って問いかけます。
ええと、だから……。
総領娘様は少し言葉を濁らせた後で、
「聖でも、怒ることはあるの、って」
「それで、そのお方はなんと？」
「それがね、私の言葉を聞いたら急に笑い出しちゃったわ、口元を押さえて。とても予想外だったみたい」
総領娘様によると、その聖白蓮という方はその言葉にひとしきり笑って、満面の笑みでこう言ったそうです。
『もちろん、ありますわ。私も生きていますから』
私はもちろん、その聖白蓮という人物に会ったことはありませんでしたが、優しげにそう話すその御方の様子が目に浮かぶようでし

た。
しかし、そう言われても、総領娘様は納得が出来なかったのだそうです。どうしても、その聖が怒っているところを想像出来なかったということでした。

「それでね、私、どうしても気になって続けて聞いたの。一体あなたは、どんな時に怒るの、って」

そうしたら――。
聖白蓮という女性は、少し考えていたようだったらしいのですが、

「仏の顔も三度まで」
「はい？」
「だから、その人が言ったの。『仏の顔も三度まで』って」

言った後、聖白蓮は再び薄く笑ってこう言ったのだそうです。

『自らを仏と重ね合わせるなど、大変恐れ多きことで、厳に慎むべきことではありますが、私の性格を簡潔に表すと、それが一番しっくりくるかと思いますわ。これは、どんなに温和で優しい人間でも、何度も失礼なことや嫌なことをされると怒るという意味でございます』

なるほど、と。
総領娘様もそれで、少しは納得が出来たそうです。

「確かに、嫌なことを何度もされたら誰だって怒りたくなるわ」
「はあ、おっしゃる通りかと」

しかし私が、そう相槌を打つと、総領娘様はまるで出来の悪い生

徒を見るような目で睨みました。

「衣玖、あなたねえ……」

と、いつものように、ぷりぷり頬を膨らませます。

「あの、私が何かおかしなことを申しましたでしょうか？」

「ええ、おかしいわ。おかしいおかしいおかしい！　どんぶらおかしいわ！」

と、地団駄を踏んで、ぶるぶる頭を振ります。

「ど、どんぶら、おかしい？」

それは一体、どういう言葉なのでしょうか。

「とにかく！　あなた、私に怒ってないの？」

「え、ええと、あのう？」

「そうやって、いつも涼しい顔しちゃって、すましちゃって、何も思ってないの？　何度もあんなイタズラして、私のこと、怒ってないの？　怒鳴ったりしないの？」

総領娘様の瞳の端には、涙の粒が輝いています。

「それはどういうことなの？　あなたは私のことなんてどうでもいいってこと？」

「そ、そんなまさか……」

「でも、そういうことじゃないの？　あなたは、私なんてもう怒る意味なんてないって思ってるんじゃない？　だから、そんなに無感情なのよ」

そこで、ようやく、私は合点がいきました。なんと私は鈍感だったのでしょう。
総領娘様は、ただ、私の怒った顔が見たかったのです。たったそれだけ、だったのです。
いつも暇を持て余している総領娘様のことですから、その聖白蓮というお方の話を聞いて、本当なのか、私で試してみたというのは、如何にもありえそうな事です。

『仏の顔も三度まで』

しかし、いざ怒らせようとしてみたものの、あまりにも反応が薄い私を見て、きっと総領娘様はがっかりなされたのでしょう。
そして、こう考えた。
自分は衣玖にとって、取るに足らない存在なのではないか、だからこそ、怒らないのではないか、と。
自分は衣玖に、『どうでもいい』と思われている。
総領娘様が悲しそうにしていらっしゃるのはこういうわけだったとうことです。
全く、
全く、それに気がつかないとは、情けない話です。いつも、総領娘様のお傍に居ながら、この程度のことが分からないなどと。
私は知らず知らずの内に、総領娘様の心を傷つけていました。
申し訳ないことをしてしまったものです。

ですが、
ですが……。
それは大きな誤解なのです。

そう、私の中には、先ほど読んだ物語の冒険者のことが浮かんで

いました。
それから私はそっと、目を伏せ、不機嫌そうにそっぽを向く総領娘様の頬に手を伸ばしました。ほんのりと桃色に赤らんだその可愛らしい頬にです。

「な、何よ、衣玖」

驚いた総領娘様は、ぎょっとして私を見つめました。

「違いますよ、天子様」
「何よ、じゃあ、どういうこと？」

私は、ですね。

「天子様のことを、いつもとても素晴らしいお方だと思っているのです」
「す、素晴らしい？　私が？」
「天子様は、私にはない素晴らしいものをお持ちなのです。ですから、私はいつも天子様の行動に心を動かされ、静かに感動しているのですよ」
「ちょっとちょっと、どういうつもり？　ほ、褒めたって何か起こるとかないわよ？」

総領娘様は目を点にされます。驚いていらっしゃるのでしょう。
しかし、構わず私は言葉を続けました。

「天子様が、聖白蓮というお方を素晴らしいと思ったように、天子様には天子様の素晴らしいものがあるのですよ。それは誰にも代えがたい魅力です」
「……い、衣玖……」

「天子様はいつも明るくいらっしゃいます。大抵のことでは塞ぎこむことなく、いつでも活動的で、好奇心旺盛。どんなときも自分の足で歩き、知らないことを自分の目で確かめたいとお思いになります。あんな風に、頻繁に地上を行き来するなど、私には、とても真似できない行動力でございます」
「で、でも、それは、いけないことだってあるし」

総領娘様はそう声を落としました。一応、悪いことをしているという自覚はあるようです。
しかし、私は首を振ります。

「いえ、確かにそうであったとしても、それは天子様の魅力であることには変わりありません。恐れを知らず、新しいことに眼を向ける力は、いつも部屋に閉じこもってばかりの私と正反対のものです。そして、このイタズラにしても……」
「イタズラにしても？」
「私にはとても真似できないものや、思いつかないものばかり。私でしたら、思いついたとしても、そもそもやろうとする前に尻込みしてしまいますもの」
「……衣玖」
「私は、あなた様と一緒にいるのが楽しいのです。ですから、ですから……」

言いながら、私はこっそり片手に隠していた先ほどの粉袋を、総領娘様に派手にぶつけました。
パフ――。
「きゃわん！」
「そのような困ったお顔をなさらないよう。天子様らしくありません」

「衣玖、あなた。や、やったわねー」

すると、真っ白のお顔になった総領娘様は、落ちた粉袋を拾い上げると、再び、私に向かって投げつけてきました。

咄嗟に、机の上にあった本を盾にしましたが、粉袋はそこを避けて飛んできて、私の腹部に当たります。

「きゃあ！」

再び粉が飛び散り、部屋が霞みます。

その中を、元気な総領娘様の声が飛んできました。

「衣玖、これで終わりだと思ったら大間違いよ！」

そうすると、粉煙の中から、次々に新たな粉袋が飛んできます。私は必死で避けようとしたのですが、幾つかは命中し、新たな煙となって部屋に立ち込めます。もうすっかり、部屋は汚れ、私の服も、元の色が分からないほどに、粉にまみれていました。

しかし、こうなれば、もうどうなろうと結果は同じです。私は遠慮無く落ちていた袋を掴めるだけ掴むと、「えいやっ！」と総領娘様に向かって投げました。

すると、一瞬の沈黙の後、ぎゃあ、と悲鳴が上がり、続けて大きな物音がします。

「そ、総領娘様！」

私は血の気が引きます。

どうやら、総領娘様はバランスを崩して、転んでしまったようでした。

もしも、総領娘様にお怪我があれば、大変なことです。

「総領娘様、ご無事ですか！？」

私はすぐさま駆け寄りそう呼びかけますが、

「ふっふっふ。衣玖、あれほど私のことは天子と呼びなさいって言ったのに、約束を破ったわね。覚悟なさい！」

急に背後から声がしたと思うと、私は背中を押され、目の前の粉袋の山に顔から突っ込みました。

「ふふふふ。衣玖、あなたいい気味だわ。そこで粉を頭から被って反省するといいわ」

総領娘様の声です。

どうやら、私は罠にはまったようでした。不覚です。

しかし、そこでやられっぱなしの私ではありません。

「そうは、させません」

と、声を張り上げ、かろうじて起き上がると、ふいを衝いて総領娘様諸とも、再び粉の中に体を突っ込みます。

「こらー、衣玖。あなた許さないんだからね！」

「ふふふふ……」

そんなこんなで、気がついた時には、二人とも息も絶え絶えになっていました。

当然、二人してあんなに粉の入った袋を投げつけ合ったということで、部屋は真っ白。本は散らばっているわ、机はひっくり返って

いるわで、とんでもない惨状でした。
やがて、その騒ぎを聞きつけた天子様のお父様が駆けつけ、私たちはこっぴどく叱られてしまいました。あんな風に、怒られたのは、きっと今まで初めてのことでしょう。
しかし、なぜでしょうか。
私と総領娘様はどこか叱られている最中もワクワクしているような、そんな気持ちを共有をしているような、そんな不思議な心地を感じていました。
叱られているのに、そんなことがどうでも良くなるような、清々しい気持ちでした。
これが、総領娘様といたずらの話の顛末です。

永江衣玖が後に記す。

物語の中の魔物は、いったい、どこにいるのでしょうか？

私は知りません。
実はあの時、私が読んでいた物語には、ある『謎』がありました。
町人に称えられ、お祭りまで伝統的に引き継がれている冒険者でしたが、当の本人は、魔物を倒した後、ほとんど、物語の中で語られていないのです。
それと言うのも、冒険者はその後、すぐに、町人の前から姿を消してしまったからでした。
どこに行ったのか、分かりません。
一人で行ったのか、仲間も連れて行ったのか、いつ出発したのか、傷の手当はきちんとしたのか、誰一人として、知る者はいませんで

した。そのため、物語にも、一切記されていません。
彼は、今でもどこかで、破天荒な冒険をしているのでしょうか。
私は時々、そんな風に思いを馳せたこともありました。
あの持ち前の勇気と非凡な才能で、危険な罠をくぐりぬけ、魔物を退治しているのでしょうか。
しかし、考えても、一切、分かりません。
残りのページは全て空白のままなのです。

しかし、今ではそんなことを思ったりはしなくなりました。なぜなら、私は既に、別の冒険者を知っているからです。その冒険者はいつでも暇を持て余していて、とてもわがままで、めちゃくちゃで、トラブルばかり起こします。
私はその度に、困ることもありますし、大変な思いをすることもあるのですが、そのお方はそれでいて、とても可愛らしい人なのです。

ですから、私は、その方を時々、とても愛おしくなって、

つい、怒ってしまうのです。

Ｄａｙ２　いたずらのこと（後書き）

どうも、ヒロユキです。第二話、いかがでしたでしょうか。いやー、世の中にはいつも物静かで、ちょっとやそっとでは怒らない人っていますよね。東方のキャラクターでは、特に衣玖さんやひじりんはそんな感じがします。衣玖さんの場合、天子がそれとは真逆で騒がしいイメージがあるせいなのか、そんな性格が際立って感じるような気もします。でも、そんな人がたまにムキーッってなったり、羽目を外すとなんだかとても新鮮で、意外な一面にドキッとすることもありますよねー（僕だけか？）。いやいや、ギャップって大事っすよ、ギャップ。ね。

そんなこんなで、例によって次回の更新は未定です。出来ればまだ書いていきたいのですが、何の計画も立っていない以上、やはり予定は未定です。すいません。

忙しない文章でしたが、それでは、また、会える日まで……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6399s/

東方永刻記　～Iku’s Diary～

2011年10月6日00時26分発行